日本語における非対格他動詞文の一考察

淡江大学　徐佩伶

目次

1. はじめに **1**
1.1 非対格性と他動性 **2**
1.2 問題提起 **3**
2. 考察内容 **4**
2.1 先行研究（影山 **1996**） **4**
2.2 意味的な制限 **5**
2.3 考察方法 **6**
3. 考察と分析 **7**
3.1 -e-反使役化タイプ **7**
3.2 -ar-脱使役化タイプ **9**
3.3 -as/os-使役化自動詞 **10**
3.4 -e-使役化自動詞 **11**
4. 結論 **12**
参考文献 **12**

1. はじめに

本発表では、日本語における非対格動詞の他動詞化(語彙使役化)の統語現象を考察し、主語が目的語に対しての働きかけが意味的に薄い「非対格的他動詞構文」を考察する。

(1)　他動詞文
　太郎が木を倒した。　（「倒す」の受け手は「木」）
　(cf. 太郎が次郎を殴った。（活動動詞/接触・打撃の他動詞）「殴る」の受け手は「次郎」)

(1)対して、(2)における他動詞は目的語の状態変化を表すが、解釈として目的語を含む動詞句が、主語の状態を表す。このような「主語のある状態を表す」自動詞的な解釈は例(1)にはできない(3)。

(2)　a.　太郎が骨を折った。（太郎の骨が折れている/太郎は骨が折れている）
　b.　幸子が夫を亡くした。（幸子の夫がなくなっている/幸子は夫がなくなっている）
　c.　木が芽を出した。（木に芽が出ている/木は芽が出ている）

(3)　a.　≠太郎の木が倒れている。
　b.　*太郎に木が倒れている。
　c.　*太郎は木が倒れている。

本発表は、(2)に示したような構文を「非対格他動詞文」と称し、日本語における「非対格他動詞文」の実現を語彙的、統語的、ないし意味的な側面からを考察する。結論的に、「非対格他動詞文」の認可は、動詞の意味、主語の意味役割、主語と目的語との意味関係などにいずれも関係するということである。

1.1 非対格性と他動性

非対格動詞が意味的に対応する他動詞用法を持つということは、世界の言語においてまれな現象ではない((4)-(6))。

(4) a. The pot *broke*. ($NP_{[theme]}$ V) (H&K 2002:1 (1)(3))
b. I *broke* the pot. (S V $NP_{[theme]}$)
（$break_{vi}$ vs. $break_{vt}$）

(5) a. Xiaohai sheng le. (小孩生了) ($NP_{[theme]}$ V)
子供 生む ASP[1]
‘子供が生まれた。’
b. Xiaomei sheng xiaohai le. (小美生小孩了) (S V $NP_{[theme]}$)
Xiaomei 生む 子供 ASP
‘Xiaomei が子供を生んだ。’
（$sheng_{vi}$ ‘生 $_{vi}$’ vs. $sheng_{vt}$ ‘生 $_{vi}$’）

(6) a. 木が倒れた。 ($NP_{[theme]}$が V)
b. 桃太郎が木を倒した。 (S が $NP_{[theme]}$を V)
（「倒れる」vs.「倒す」）

非対格動詞が他動詞化するときに必ず何らかの統語操作が必要となる。その操作は語彙レベルで起きるのか、統語レベルで起きるのかは言語によって、また語彙によって異なる。[2]

(7) 英語：動詞 *break* による主要部移動
a. [the pot…[$_{VP}$ <the pot> *break*]]
b. [I [$_{vP}$ *break*+$v_{[ACC]}$ [$_{VP}$ the pot <*break*>]]]

---

[1] ASP は「Aspect」の略で、アスペクトをあらわす要素を意味する。

[2] 本発表において前提となる理論の枠組みを次のように仮定する。
a. 動詞に構造があり、構造の階層性と VP-shell を仮定する。[$_{vP}$ *v* [$_{VP}$ V]]
b. 語彙範疇 V と機能範疇 *v* を仮定する。
c. 機能範疇 *v* は対格[ACC]（Accusative Case）素性を持ち、内項に対格を付与する。
d. 構造：[$_{vP}$ 外項 $v_{[ACC]}$ [$_{VP}$ 内項 V]]

(4)-bにおける*the pot*は、対格が音声的に実現されていないだけで、主語ではなく、目的語として解釈される。[3]　中国語の場合では、(5)-bに示したように、非対格動詞*sheng* ‘生まれる’が他動詞*sheng* ‘生む’として使われるときに、生まれる「対象」（*xiaohai* ‘子供’）が一般の他動詞文と同様に、目的語位置に現れなければならない。

日本語は形態格を持つ言語であり、他動詞構文では目的語に一般に「対格」を表す「ヲ格」が与えられている。[4] (6)-bに示したように、非対格動詞からなる他動詞構文でも目的語に「ヲ格」がつき、(8)(9)が示すように、意味からしても「対格」が与えられた項が動作の受け手（undergoer）となっていることが状態変化の他動詞文と一致している。

(8) a.　太郎が次郎を殺した。（その結果、次郎が死んだ）→一般の状態変化他動詞文
　　b.　太郎が木を倒した。（その結果、木が倒れた）→非対格動詞からなる状態変化他動詞文

(9) a.　太郎が電源を切った。（電源が切れた）
　　b.　友情が仲間たちを集めた。（仲間たちが集まった）
　　c.　お茶漬けが胃液を薄めた。（胃液が薄まった）

これらの事実は次のように記述できる(10)。

(10) 非対格動詞からなる他動詞が取る内項は、統語的に対格（統語的な他動性）を持ち、意味的に動作の受け手（undergoer）である (もちろん、状態変化の対象でもある) 。

1.2 問題提起

ところが、(11)の例は(10)に示した一般化にとって反例になっている。

(11) a.　桜がつぼみ**を**ひらく。
　　b.　木が芽**を**出した。
　　c.　コンピュータがミス**を**生じた。　　(影山 1996:114(43a))

非対格動詞である「ひらく」「出る」「生じる」が他動詞化し、他動詞文の構造を持っている。しかし、それらの他動詞構文は状態変化の使役とは異なり、むしろ、目的語を含む動詞句が主語の状態を表す述語である(12)。

(12) a.　桜が[[つぼみがひらく] という状態]にある
　　b.　木が[[芽が出ている]という状態]にある
　　c.　コンピューターが[[ミスが生じた] という状態]にある

---

[3] 英語では対格が音声的に実現されているのは代名詞のみである（例：I like *him*, He likes *me*）。

[4] 「会う」のような動詞は格が語彙ごとに指定されている場合であり、ここの議論から外す。

このような他動詞文、主語が「動詞句が表す状態」の主語として解釈される場合を、「非対格他動詞文」と呼ぶ。[5]

影山（1996:115）はこの現象について、他動詞文であるけれど、概念構造としては自然発生的な非対格構造を持つと分析している。その概念構造を(13)に示す。

(13) [$_{Event}$ コンピューター$_i$/木$_i$ BECOME [$_{STATE}$ ミス/芽 BE AT-z$_i$]]

(影山 1996:114(45))

影山（1996:116）は、BECOME の主語と AT の z が同一指示であり、BECOME の目的語になるものはそれにはさまれた構造にあるとき、非対格動詞であっても対格が発動されると説明している。

本研究は、他動詞句が主語の状態を表す「非体格的他動詞構文」の実現がどのような統語環境、または意味的な条件の下で許されるかという問題の解明を目指し、考察を行う。

2. 考察内容

以下、このような「非対格他動詞文」の実現が形態的、意味的、統語的側面から予測できるかどうかを調べる。

2.1 先行研究（影山 1996）

影山（1996）では、意味論の立場から動詞の概念構造で自他対応を分析し、主に語彙の「反使役化」「脱使役化」と「他動詞への使役化」といった三つの操作を仮定している。「反使役化」タイプの動詞と概念構造を(14)(15)に示す。

(14) -e-による反使役化動詞（状態変化の達成、動作主を要求しない）
割る→割れる、切る→切れる、崩す→崩れる、織る→織れる

(15) 概念構造における-e-反使役化 （影山 1996: 145(14)）
[x CONTROL [y BECOME [y BE AT z]]] （他動詞）
→[x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT z]]] （自動詞）

(15)では、使役者(x=y)が変化対象(y)と同定され、意味的に束縛される。それに対して、(16)にあるように、-ar-という形態を持つ自動詞は「脱使役化」タイプであり、その概念構造は(17)である。使役者(x)は自動詞用法において完全に脱落する。

(16) -ar-による脱使役化動詞（動作主を意味的に含意する）
詰める→詰まる、つなぐ→つながる、掛ける→掛かる、薄める→薄まる

[5] 張(2011)は「非意図的な他動詞文」と呼んでいる。

(17) 概念構造における-ar-脱使役化　　（影山 1996:188(116)）

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT z]]]　　（他動詞）

[x→CONTROL [y BECOME [y BE AT z]]]

↓

ϕ　　（自動詞）

「-e-反使役化」動詞と「-ar-脱使役化」動詞からなる自動詞構文において、反使役化自動詞文は動作主を含意しないのに対し、脱使役化自動詞文は動作主を含意するという違いがある。

一方、以上の操作と異なり、自動詞は使役化形態素（-as/os-と-e-）を付加することで他動詞になるという「他動詞への使役化」という操作がある(18)(20)。それらの要素をつけることで、(19)(21)に示すように、CAUSEやCONTROLという意味が構造に導入され、目的語に直接に/間接的に働きかける主語xが導入される。[6]

(18)　-as/os-による自動詞使役化　　（影山 1996:195 (135)）

鳴る→鳴らす、飛ぶ→飛ばす、ずれる→ずらす、減る→減らす、動く→動かす

(19) 概念構造における-as/os-自動詞使役化　　（影山 1996:197(139)）

[$_{EVENT}$ x ACT] CAUSE [$_{EVENT}$ …]

（x は動作主でも出来事や行為でもよい）

(20)　-e-による自動詞使役化

建つ→建てる、進む→進める、並ぶ→並べる、整う→整える

(21) 概念構造における-e-自動詞使役化　　（影山 1996:197(141)）

x CONTROL [$_{EVENT}$ …]

（x は動作主に限る）

2.2 意味的な制限

一つの動詞には複数の意味があり、自他対応のある動詞であっても常に他動詞構文と自動詞構文が対応するわけではないということである(22)。[7]

---

[6] 使役化形態素-as/os, -e-は構造上、機能範疇の *v* に当たり、対格を与える能力がある。

[7] 「お腹を壊した」も対応する自動詞文がない（「*お腹が壊れた」）。この事実を影山（1996）による分析で説明できる。「壊れる」は「-e-反使役化自動詞」で、必ずしも動作主が含意されていないため、動作主を要求する場合では使えない。「お腹を壊した」という他動詞文では「動作主」以外で状態変化を起こすことはできない。「太郎は（何かを食べて）お腹を壊した」はよいのに対し、「太郎は（何もしなくても）お腹を壊した」ということはない。太郎は「お腹を壊した」の経験者である一方、不注意でも「お腹を壊す」事態を引き起こす動作主でもある。よって、「お腹が壊れた」が言えないのである。

(22) a.　花瓶を割った。→花瓶が割れた。　（影山 1996:191(125)）
　　b.　ウイスキーを水で割った。→*ウイスキーが水で割れた。

影山（1996:191）によると、動詞にハッキリした動作主を要求するような場合、「動作主がウイスキーを割った」というような場合、反使役化が適用できない
　また、脱使役形の動詞の場合、もとの他動詞の主語が「意図的な動作主」でない場合、脱使役化が適用できない（影山 1996:186）。

(23) a　新雪が山頂をおおった。　（影山 1996:186(111)）
　　b.　*山頂が新雪でおおわった。

従って、以上の意味的な制限を考慮した上で、次のような条件を設定し、考察を行う。

(24) a.　条件 A（反使役化の他動詞の条件）
　「X が割れる」が成り立つならば、「X を割る」が成り立つ。かつ「X を割る」には必ず CONTROL が関与する。（CONTROL は動作主、使役者、経験者、原因など）
　　b.　条件 B（脱使役化の他動詞の条件）
　「X が植わる」が成り立つならば、「X を植える」が成り立つ。かつ「X を植える」の CONTROL は意図的な動作主(AGENT)でなければならない。

(25) X CONTROL Y
　＝X が Y の成立を直接に左右する　(影山 1996:86(84))

2.3 考察方法

　以上、影山（1996）による四種類の自他交替動詞のタイプを仮定し、(i)非対格他動詞文の実現を形態的、統語的な側面から予測できるかどうかを確認する((26)-a)。(ii)「外項」が「非対格他動詞文」において動詞句が表す状態の主体となっている点は、CONTROL の外項と関係するかどうか((26)-b)、(iii) また、自動詞化と他動詞化といった統語的な特徴が「非対格他動詞文」の実現に関与するかどうかを見る((26)-c)。

(26) a.　形態的：-e-反使役化、-ar-脱使役化、-as/os 自動詞使役化、-e-他動詞使役化
　　b.　意味的：外項の意味役割（動作主、CONTROL（使役者など）、EVENT）
　　c.　統語的：自動詞から他動詞化、他動詞から自動詞化（対格の付与に関係する）

(27) a.　-e-反使役化、-ar-脱使役化、-as/os 他動詞化、-e-他動詞化の動詞の他動詞構文を作る。
　　X が $V_{自}$→Y が X を $V_{他}$
　　b.　「YがXを$V_{他}$」では「$V_{他}$がXに対する働きかけ」の意味のほか、「Yが「Xを$V_{他}$」という

状態にある」という意味が取れるかどうかを日本語母語話者に確認する。[8]

(28) 予測

a. -e-反使役化自動詞は、「状態の達成」に焦点を当てるため、意味的に「動作主」を含意しない。それを前提として、このタイプの自動詞が他動詞に還元すると、項構造において、外項が必ずしも「動作主」として指定されないことになる。そうすると、外項が**「動作主」以外**の意味役割を担うことが可能になる。[9]よって、非対格他動詞文の実現が可能である。

b. -ar-脱使役化自動詞は、意味的に「動作主」を含意している。それを前提として、このタイプの自動詞が他動詞に還元すると、項構造において外項が**「動作主」として指定**されることになる。「動作主」以外の意味役割を担うことができないため、非対格他動詞文の実現が不可能になる。

c. -as/os 自動詞使役化の他動詞は、-as/os の付加によって外項が導入され、その外項は「動作主」「出来事」などのように、**「動作主」以外**の意味役割を担うことができる。よって、非対格他動詞文の実現が可能である。

d. -e-自動詞使役化の他動詞は、-e-の付加によって外項が導入され、その外項が「動作主」に限る。項構造において外項が**「動作主」として指定**されているとするため、「動作主」以外の意味役割を担うことができない。よって、非対格他動詞文の実現が不可能である。

3. 考察と分析

3.1 -e-反使役化タイプ

(29) 考察した動詞：割れる、抜ける、砕ける、折れる、ほどける、欠ける、崩れる

-e-反使役化タイプの動詞では、非対格他動詞文の解釈を許す場合がある。

(30) a. 太郎の爪が割れた。→（ドアで）太郎が爪を割った。
b. 太郎の歯が砕けた。→（交通事故で）太郎が歯を砕いた。
c. 太郎の歯が欠けた。→太郎が歯を欠いた。
d. 太郎の骨が折れた。→太郎が骨を折った。
e. 太郎の心がほどけた。→太郎が心をほどいた。
f. 太郎の体調が崩れた。→太郎が体調を崩した。

(31) 他動詞状態構文解釈

a. 太郎が[[爪が割れている]状態]にある　　= ((30)-a)

---

[8] 四人の日本語母語話者に確認した。

[9] 意味役割の付与子は何であるかをここで問題しない。

b. 太郎が[[歯が砕けている]状態]にある = ((30)-b)
c. 太郎が[[歯が欠けている]状態]にある = ((30)-c)
d. 太郎が[[骨が折れている]状態]にある = ((30)-d)
e. 太郎が[[心がほどけている]状態]にある = ((30)-e)

一般の他動詞文と非対格他動詞文は受身構文において異なる((32)-b v.s.(33)-b)。

(32) 一般他動詞構文と受身文
a. 太郎が窓ガラスを割った。
b. 窓ガラスが太郎に割られた。

(33) 非対格他動詞文と受身文
a. 太郎が病気で爪を割った。
b. *爪が病気で太郎に割られた。

ところで、(30)に示した他動詞は非対格他動詞文を作るには生産的ではないことが(34)の例から分かる。もし(30)に示したように、主語と目的語は全体部分の関係（例えば、人と歯/爪/骨/心）にないといけないということを考えると、(34)の例は反例となっている。

(34) a. 眼鏡のレンズが割れた。→*眼鏡がレンズを割った。
（意図する非対格他動詞文の解釈：眼鏡が[[レンズが割れている]状態]にある）
b. 氷河の表面が砕けた。→*氷河が表面を砕いた。
（意図する非対格他動詞文の解釈：氷河が[[氷山が砕けている]状態]にある）
c. 傘の柄が折れた。→*傘が柄を折った。
（意図する非対格他動詞文の解釈：傘が[[柄が折れている]状態]にある）
d. 靴の紐がほどけた。→*靴が紐をほどいた。
（意図する非対格他動詞文の解釈：靴が[[紐がほどけている]状態]にある）

これらの例は、主語の状態について述べるという「非対格他動詞文」の解釈が意味的に可能なはずであるが、文法的には許されない。影山(1996)により、-e-反使役化の他動詞主語が CONTROL でなければならないとすれば、眼鏡、氷河、傘が CONTROL の主語ではないため、文が非文法的だと分析できる。しかし、主語が CONTROL（経験者）であるという条件だけなら、次の例は非対格他動詞文として許されるはずである(35)-(ii)。

(35) 患者が髪の毛を抜いた。
(i) 他動詞文解釈：(精神)患者が自分の髪の毛をわざと抜いた
(ii) 非対格他動詞文解釈：*患者が [[髪の毛が(治療で)抜けている]状態]にある

(36) *患者が放射線治療のせいで髪の毛を抜いた。

このように、-e-反使役化タイプの他動詞は常に非対格他動詞文の解釈を許すわけではないことが分かる。次は、-ar-脱使役化他動詞を見てみよう。

3.2 -ar-脱使役化タイプ

(37) 考察した動詞：植わる、詰まる、貯まる、混ざる、薄まる、

脱使役化タイプの動詞は意味的に主語が「意図的動作主」を要求するため、経験者として解釈できない(38)。

(38)　桜の木が植わった。→太郎が桜の木を植えた。
　(i) 太郎が意図的に/うっかりして桜の木を植えた。（動作主）
　(ii) *太郎が気づいたら桜の木を植えた。（経験者）

また、主語と目的語が全体部分の関係や所有関係にあっても容認できない(39)。

(39) a.　太郎の鼻が風邪で詰まった。→*太郎が風邪で鼻を詰めた。
　（意図する非対格他動詞文の解釈：風邪で太郎が[[鼻が詰まった]状態]にある）
　b.　お金持ちのお金が貯まった。→#お金持ちがお金を貯めた。[10]
　（意図する非対格他動詞文の解釈：お金持ちが[[お金が貯まった]状態]にある）

しかし、(40)の他動詞文は、主語と目的語は包含関係にあり、主語が「意図的動作主」でなくても容認度が高い。

(40)　海水の塩分が薄まった。→海水が大雨で塩分を薄めた。
　（意図する非対格他動詞文の解釈：海水が[塩分濃度が薄まる]状態にある）[11]

(41) a.　サークルの仲間たちが集まっている。→*サークルが仲間たちを集めた。
　（意図する非対格他動詞文の解釈：サークルが[[仲間たちが集まった]状態]にある）
　b.　ダムの水が溜まった。*ダムが大雨で水を溜めた。
　（意図する非対格他動詞文の解釈：ダムが[[大雨で水が溜まった]状態]にある）
　c.　カフェラッテに牛乳が混ざっている。→*カフェラッテが牛乳を混ぜている。
　（意図する非対格他動詞文の解釈：コーヒーが[[ミルクが混ざった]状態]にある）

---

[10] #という記号は、文自体が文法的であるが、ここで意図する意味では許されないということを示している。

[11] 「塩分」が「海水「の一部であり、塩分濃度の変化が海水の内部に起こるものである。この場合は非対格他動詞文として許す日本語母語話者がいる。

→(41)は容認されないのは、「外項が意図的動作主である」という意味的な要請が原因である。
→(40)では、「塩分が薄まった」ということは「主体」(海水)の「内部に変化が起こる」（⇔(30)）。

以上の考察から、-ar-脱使役化自動詞は-e-反使役化自動詞より、非対格他動詞文として容認しにくく、非対格他動詞文の実現は動詞の語彙レベルの問題だけではなく、文の意味に関与することになる((30) (40))。以下、自動詞使役化の場合を見る。

3.3 -as/os-使役化自動詞

(42) 考察した動詞：ずれる、減る、枯れる、蒸れる、なくなる、起こる、落ちる、出る

-as/os 使役化自動詞は、(28)-c によると、使役要素-as/os の付加によって他動詞化されても、外項に対して「動作主でなければならない」という要請がないため、非対格他動詞文が可能だと予測している。(43)の例では主語が「経験者」として解釈される場合や、主語が「場所」と解釈される場合など、非対格他動詞文として許される。

(43) a. 幸子の夫が亡くなった。→幸子は事故で夫をなくした。
b. 木の葉っぱが落ちた。→木は風で葉っぱを落とした。
c. 葉っぱの先端が枯れた。→葉っぱが寒さで先端を枯らした。[12]
d. 木に芽が出た→木が芽を出した。
e. 家族や知人に心筋梗塞が起こった。→家族や知人が心筋梗塞を起こした。
→共通点：主語と目的語が全体部分の関係に、目的語の状態変化が主語の内部に起こること。

「夫がなくなった」ということもある種の「主語の内部に起こること」である。この関係は、身内関係にない他人がなくなった場合には、非対格他動詞文が使えないという事実で証明できる。

(44) a. *太郎が隣の会社の社長をなくした。
b. *太郎が友達のおばさんをなくした。

(45)における他動詞文では、(43)-b,c,d のように主語が経験者ではなく、目的語の変化が主語内部にあるという状況を設定しても、非対格他動詞文の解釈が許されない。

(45) a. 地震で大陸の地層がずれている。→*大陸が地震で地層をずらしている。
（意図する非対格他動詞文の解釈：大陸が[[地層がずれる]状態]にある）

---

[12] 「枯らす」の場合は容認度がゆれる。(43)-c の例が自然状態として解釈されるが、(i)の例になると、擬人化的で他動詞的な解釈が強い。また、両方とも非対格他動詞文の解釈として容認する日本語話者がいる。

(i) あの芝生が草を枯らした。

b. 体内の水分量が減った→*（酷暑で）体内が水分量を減らした。
（意図する非対格他動詞文の解釈：体内が[[水分量が減る]状態]にある）

f. 足のつま先が蒸れた。→*（暑さで）足がつま先を蒸らした。
（意図する非対格他動詞文の解釈：足が[[つま先が蒸れる]状態]にある）

(45)と(43)-b,c,dの二つのグループにおいて考えられる相違は、(i) (43)-b,c,dは自然現象であり、(45)は自然現象ではない、[13] (ii) (43)-b,c,dに現れた動詞は「出現・消滅」の意味を持つが、(45)における動詞はその意味を持たない、という二点である。しかし、「自然現象」という説明では(43)-a, eにおける例の容認性を捉えることができず、「出現・消滅」動詞の説明では、前述した「薄める/折る/欠く/割る」などの動詞でも非対格他動詞文を許すことが捉えられない（それらの動詞の意味から更なる一般化が必要）。

以上の考察から、変化が主語の内部に起こるかどうかと、動詞の意味などが非対格他動詞文の生成に関与しているようである。最後に、-e-他動詞使役化を見てみよう。

3.4 -e-使役化自動詞

(46) 考察した動詞：建つ、進む、並ぶ、整う

-e-使役化自動詞の場合も、-as/os タイプと同様に本来自動詞で、-e-という使役形態素の付加によって他動詞化する。考察した動詞のうち、非対格他動詞文として容認できるのは、「整える」と「並べる」である(47)。（目的語の変化が主語の内部にある場合と、主語が場所を示す場合）

(47) a. 腸の動きが整った→（乳酸菌によって）腸が動きを整えた。
（意図する非対格他動詞文の解釈：腸が[[動きが整う]状態]にある）

b. 体の調子が整った→?（心地よい睡眠によって）体が調子を整えた。
（意図する非対格他動詞文の解釈：体が[[調子が整う]状態]にある）

c. 広場にいろいろなテントが並んでいる。→広場が（祭りで）いろいろなテントを並べている。
（意図する非対格他動詞文の解釈：広場が[[いろいろなテントが並んでいる]状態]にある）

(48)に示す「進める」と「建てる」の場合は、非対格他動詞文として容認できない。（同じように目的語の変化が主語の内部にある場合と、主語が場所を示す場合）

(48) a. 地球の温暖化が進む。→*地球が（二酸化炭素の増加で）温暖化を進める。

b. 科学技術の革新が進む。→#科学技術が革新を進める。（他の技術の革新なら OK）

c. 空き地に家が建つ。→*空き地が家を建てる。

---

[13] 「地層がずれる」ということは、必ず何らかの外力によって起こるものであるので、「葉が枯れる」のように「自発的」ではない。この点では、「地層がずれる」という現象は「自然現象」から区別する。

-e-使役化自動詞は他動詞構文にするときに、主語が「意図的動作主」を強く要請するため、動作主以外の主語が許されない。予測として、非対格他動詞文は不可能であるが、(47)のような例は逆に例外となっている。これは-ar-脱使役タイプである「薄める」が非対格他動詞文を許す例と似ているが、例外といっても、非対格他動詞文として容認する理由も説明しなければならない。

4. 結論

-e-使役化タイプの動詞は、-as/os 使役化タイプの動詞と比べて非対格他動詞文を認可する場合は多くない。この点は、-e 反使役化タイプの動詞と-ar-脱使役化タイプの動詞と同じである。動詞の語彙特徴によって外項が「動作主」として指定される場合では、非対格他動詞文が実現しにくく、外項が「動作主」以外の意味役割を担うことができる動詞の場合は、非対格他動詞文が実現しやすい。ただし、この結果は非対格他動詞文を許す傾向と許さない傾向を大まかに示しただけで、非対格他動詞文の実現を予測できない。その理由として、外項が動作主以外のものを許すという条件のほか、主語と目的語の「全体部分」の関係、目的語の状態変化が主語の内部にあること、動詞の意味などの条件（十分条件ではない）も関係してくるからである。今後の課題として、非体格的他動詞の認可をどのような条件の下でできるか、広く深く検討したい。

参考文献

Adger, David (2003)　Core Syntax-A Minimalist Approach, Oxford University Press

Hale, Ken and Keyser, Jay Samuel (2002) “Prolegomenon to a Theory of Argument Structure.” MIT Press

原口庄輔・中村捷（1992）『チョムスキー理論辞典』研究社

Harley, H. (2008) “On the Causative Construction,” Handbook of Japanese Linguistics, edited by Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito. pp.20-53, Oxford

早津恵美子・高京美（2012）『コーパスに基づく日本語使役文・他動詞文の実態』コーパスに基づく言語学教育研究資料 6, 東京外国語大学大学院総合国際学研究院

Huang, C.-T. James. (1997) On lexical structure and syntactic projection. Chinese Language and Linguistics 3: 45-89. Taipei: Academia Sinica

井上和子（1976）『変形文法と日本語（上）』大修館書店

井上和子（1976）『変形文法と日本語（下）』大修館書店

Jacobsen, W. M. (1991) The Transitive Structure of Events in Japanese, Kuroshio

影山太郎（1996）『動詞意味論-言語と認知の接点』くろしお

Kuroda, Sige-Yuki. (1965) Generative Grammatical Studies in the Japanese Language. Doctoral dissertation, MIT.

Li, Yen-Hui Audrey (1990) *Order and Constituency in Mandarin Chinese*. Kluwer Academic Publishers.

仁田義雄（2009）『現代日本語文法 2』日本語記述文法研究会

Perlmutter, David (1978) “Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis”BLS4. pp.157-89

柴谷方良（1978）『日本語の分析』大修館

高見健一（2011）『受身と使役-その意味規則を探る』開拓社

張猷定（2011）『非意図的な他動詞についての研究−多義性と制約から分類』修士論文：政治大学